

反正天皇

ゆかりの地紀行

淡路・河内・百舌鳥



天保3年(1832)「上田村反正山」が寄進した「柴籬宮」の石灯籠(柴籬神社境内)

「反正天皇柴籬宮址」碑(柴籬神社境内)

丹比柴籬宮伝承地と柴籬神社(上田7丁目)

反正天皇と丹比柴籬宮

反正天皇は、丹比柴籬宮で即位しました。宮の伝承地は、河内国丹比郡の津道(長尾街道)と丹比道(竹内街道)のほぼ中央に位置します。今の松原市上田です。『古事記』や『日本書紀』には、五世紀前半、ヤマト王権の第十八代反正天皇のミヤコと記されています。五年余の治世で、河内に置かれた最初の王宮です。その地にのち創建されたのが柴籬神社です。

反正天皇は、王権が中国・南朝に使者を派遣した倭五王(讚・珍・濟・興・武)のうちの「珍」と考えられています。『日本書紀』によると、その治世は平穩にして穀物は豊作で人民は富みにぎわい、平和な時代であったと記されています。ミヤコ跡を想定させる極田山、中門、若山、反正山、齒神、高見などの地名が神社近辺に今も残っています。大阪府教育委員会より、これらの地域は埋蔵文化財包蔵地に指定されています。

「柴籬神社」と日本遺産「竹内街道・横大路(大道)」

堺の反正天皇陵古墳から竹内街道を通って丹比柴籬宮(柴籬神社)を経て飛鳥に至る道は、平成二九年(2017)、奈良県内の横大路とともに日本最古の国道として日本遺産に認定されました。柴籬神社も日本遺産の構成文化財として選定されています。



日本遺産「竹内街道」のぼり(柴籬神社)



「柴籬宮旧跡」享和元年(1801)の「河内名所図会」より。江戸時代後半の柴籬神社(天満宮)と神宮寺である観念寺(観音)を描く。左上は河内大塚山古墳。後円部に大塚社(天満宮)を祀る。

『古事記』『日本書紀』に記された反正天皇

〔古事記〕反正天皇の巻

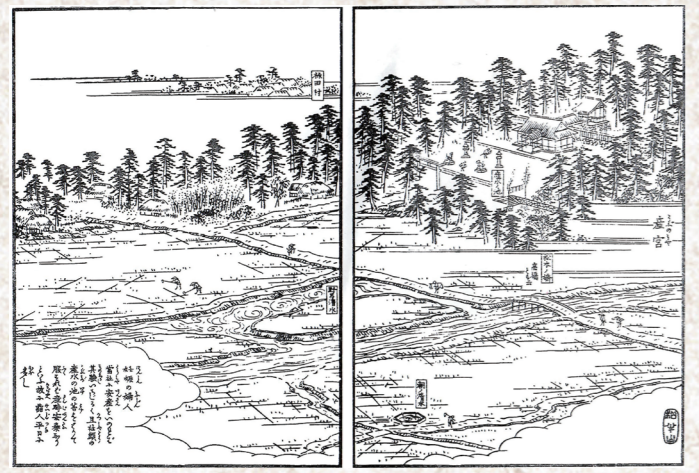
弟、水齒別命(反正天皇)、多治比の柴垣宮に坐しまして、天の下治めたまひき。此の天皇、御身の長、九尺一寸半。御齒の長さ二寸、広き二分、上下等しく齊ひて、既に珠を貫けるが如くなりき。天皇、丸邇の許基登臣の女、都怒郎女を娶して、生みませる御子、甲斐郎女。次に都夫良郎女。二柱又同じ臣の女、弟比売を娶して、生みませる御子、財王。次に多訶弁郎女。并せて四王なり。天皇の御年、陸拾歳。丁丑の年の七月に崩りましき。御陵は毛受野に在り。

〔日本書紀〕瑞齒別天皇(反正天皇)の条

瑞齒別天皇は、去来總別天皇(履中天皇)の同母弟なり。去来總別天皇の一年に、立ちて皇太子と為りたまふ。天皇、初め淡路宮に生まれませり。生れましながら齒、骨の如し。容姿美麗し。是に、井有り。瑞井と曰ふ。則ち汲みて太子を洗はまつ。時に多遲の花、井の中に有り。因りて太子の名とす。多遲の花は、今の虎杖の花なり。故、多遲比瑞齒別天皇と稱へ謂す。

(履中)六年の春三月に、去来總別天皇、崩りましぬ。(反正)元年の春正月の丁丑の朔戊寅に、儲君、即天皇位す。秋八月の甲辰の朔己酉に、大宅臣が祖木事、が女津野媛を立てて、皇夫人とす。香火姫皇女・円皇女を生めり。又、夫人の弟弟媛を納れて、財皇女と高部皇子とを生しませり。

冬十月に、河内の丹比に都つくる。是を柴籬宮と謂す。是の時に當りて、風雨時に順ひて、五穀成熟れり。人民富み饒ひ、天下太平なり。是年、太歳丙午。五年の春正月の甲申の朔丙午に、天皇、正寝に崩りましぬ。



「淡路国名所図会」(嘉永4年・1851年)に描かれた「産宮」。反正天皇が淡路島の淡路宮で生まれたという伝承地に建てられた。社殿と共に「産水ノ池」や「潮ノ清水」も描かれる。

年	天皇
元	應神
二	
三	
四	
元	仁徳
二	
三	
四	
元	履中
二	
三	
四	
元	反正
二	
三	
四	
元	允恭
二	
三	
四	

五世紀代の関係事項(『日本書紀』による)

- ▼正月、応神天皇が即位して、大和の磐余豊明宮(奈良橿原市)に都す。
- ▼三月三日、仲媛を皇后とする。皇后の妹である弟媛は、応神天皇の妃となり、淡路御原皇女を生む。
- ▼三月五日、天皇は難波に行幸して大隅宮(大阪市)に移る。
- ▼三月十四日、妃の兄媛が故郷の吉備国(岡山県)に帰りたいと願い出たので、淡路の御原の海人八十人を水手として、吉備へ送る。
- ▼九月六日、天皇は淡路島で狩りをする。その後、淡路島より吉備国に行幸する。
- ▼二月十五日、天皇は磐余豊明宮で崩す。
- ▼二月十五日、仁徳天皇が即位して、難波の高津宮(大阪市)に都す。
- ▼三月八日、葛城襲津彦の娘の磐余媛を皇后とする。
- ▼大道を難波高津宮の京中につくり、南門より直ちに河内の丹比邑(むら)に至った。
- ▼正月十五日、天皇の第二皇子の、のちの履中天皇が皇太子になる。
- ▼十月五日、石津原(堺市)に幸して、陵地を定める。
- ▼十月十八日、陵を築き、この地を百舌鳥耳原と称する。
- ▼正月十六日、仁徳天皇が崩す。
- ▼十月十七日、天皇を百舌鳥野陵に葬る。
- ▼皇太子(のちの履中天皇)の弟、住吉仲皇子は難波にあり、皇位争いから、皇太子に敵対した。皇太子は、難波から丹比道(竹内街道)を通って石上(奈良県天理市)に逃げた。三男の反正は、近つ飛鳥(羽曳野市)に飯宮を置き、仲皇子の近習に仲皇子を殺害させ、皇太子に味方することで、争いが鎮められた。
- ▼二月、皇太子が即位して履中天皇となり、磐余稚桜宮(奈良橿原市)に都した。
- ▼正月四日、弟、のちの反正を皇太子とする。
- ▼九月十八日、履中天皇は淡路島で狩りをする。
- ▼三月十五日、天皇は磐余稚桜宮で崩す。
- ▼十月四日、天皇を百舌鳥耳原に葬る。
- ▼正月二日、皇太子が反正天皇として即位する。
- ▼八月六日、大宅臣の祖の木事、津野媛を皇夫人とし、弟媛を妃とする。
- ▼十月、河内の柴籬宮に都をつくる。
- ▼正月二十三日、反正天皇が崩す。
- ▼十二月、允恭天皇が即位して、遠飛鳥宮(奈良橿原市)に都をつくる。
- ▼七月十四日、河内地方に地震がある。これより先、葛城襲津彦の孫、玉田宿禰に命じて、反正天皇の殯(もがり)をつかさどらせる。
- ▼十月十一日、反正天皇を百舌鳥耳原に葬る。
- ▼允恭天皇、淡路島で狩りをする。

皇統譜による。数字は代数。

- 16 仁徳天皇 んんとくてんのう
- 17 履中天皇 りちゅうてんのう
- 18 反正天皇 はんぜいてんのう
- 19 允恭天皇 いんぎょうてんのう
- 20 安康天皇 あんこうてんのう
- 21 雄略天皇 ゆうりやくてんのう

磐之媛 いわのひめ

住吉仲皇子 すみのえのなかつおうじ

及正天皇ゆかりの地紀行

～誕生・皇子期・治世・陵墓～

誕生 1~10 皇子期 11~16 治世 17~24 陵墓 25~26



1 産宮神社

(兵庫県南あわじ市松帆様田)
反正天皇は、仁徳天皇と磐之媛の第三皇子として淡路宮(淡路島)で生まれたと伝えられている(『日本書紀』)。産宮神社は、淡路宮跡に後世、反正天皇を祭神として創建された。境内に「産宮」「反正天皇御降誕地」の石碑が建てられている。



2 瑞井

(産宮神社境内)
反正天皇が淡路宮で生まれたという伝承から、産湯に使用したと伝える井戸である。井戸枠は整形された角柱で、廻りの石垣は明治39年11月に造られた。井戸横には兵庫県が建てた「瑞井」の石碑がある。



3 潮清水

(南あわじ市松帆江尻)
産宮神社からは、倭文川をへだてた所に反正天皇の産湯の井戸(瑞井)が伝わる。井戸は潮清水と並び、ここから湧き出た清水で汲まれたと伝えている。六角形をした井戸枠であるので、六角井戸とも呼ばれている。
※右下は昭和59年(1984)撮影のもの。



11 「仮宮旧址」の碑

(羽曳野市駒ヶ谷)
反正天皇は皇子時代、仁徳天皇の崩御後、長兄の履中と次兄の住吉仲皇子の皇位争いの中、難波から石上(天理市)に移った履中に味方し河内飛鳥の地に仮宮をつかった。伝承地は、丹比道(竹内街道)に沿っている。



12 維日谷稚宮

(羽曳野市駒ヶ谷)
反正天皇が皇子時代、河内飛鳥に置いた仮宮伝承地址に後世、反正天皇を祭神として建てられた。現在、社本神社に合祀されている。



17 柴籠神社

(松原市上田7丁目)
第18代反正天皇(はんげいてんのう)の丹比柴籠宮(たじひしばぎのみや)の伝承地に5世紀末期、第24代仁賢天皇が反正天皇を祀って建てたと伝わる。依網宿禰(よさみのすくね)・菅原道真も祀る。江戸時代、「広場の社」とか「天満宮」ともよばれた。旧松原村の総氏神である。



18 「丹比柴籠宮址」碑

(柴籠神社境内)
反正天皇が5世紀前半、ミヤコ(丹比柴籠宮)としたと伝える地に、大正8年(1919)、大阪府が建立した。柴籠神社西入口に建てられている。



19 「反正天皇」

柴籠宮址碑
(柴籠神社境内)
反正天皇の丹比柴籠宮の伝承地に、大阪府が昭和19年(1944)1月、柴籠神社表門の南入口に建てた。



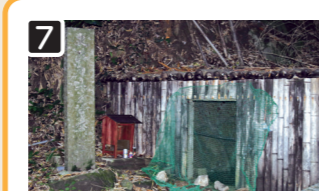
4 日光寺

(南あわじ市松帆様田)
産宮神社を鎮守とした。飛鳥時代に聖徳太子が開基したと伝える。浄土宗。
願海寺
日光寺の裏手にあり、産宮神社を鎮守とした。平安時代に真言宗の開祖空海(弘法大師)が創建したと伝える。



6 大和大国魂神社

(南あわじ市榎上楠多)
反正天皇の父である仁徳天皇の5世紀初期頃、ヤマト王権が列島統一の過程で淡路島にも進出したと考えられる。当社は、同地の「御原の海人」を統率した倭氏ゆかりの神社。淡路国二宮である。



7 御井の清水

(兵庫県淡路市佐野小井)
仁徳天皇が淡路島の寒泉(清水)を汲んで難波高津宮へ運んだと伝承される御水。「古事記」に記される。反正天皇の淡路宮生誕伝承の先がけである。



13 杜本神社

(羽曳野市駒ヶ谷)
延喜式内社である当社は、駒ヶ谷の氏神。金剛輪寺は、その神宮寺である。反正天皇の仮宮址に祀られた維日谷稚宮は、明治時代に社本神社に合祀された。



14 金剛輪寺

(羽曳野市駒ヶ谷)
反正天皇と仮宮の伝承を記録に残した覚峰(1729~1815)が住職をしていた。真言宗。観音堂が再建されており、寺額に「近飛鳥寺」とある。観音堂前の無縁塔最上位に五輪塔の覚峰墓が祀られている。



20 柴籠神社参道の松並木

(柴籠神社参道)
柴垣方面から表門に至る参道には江戸時代以降、「河内名所図会」にもあるように、数多くの松の木が植えられていた。市名の由来となった「松生し丹比の松原」の名残りの松が今も残っている。



21 柴籠神社「井原西鶴の句碑」

(柴籠神社境内)
江戸時代前半の著名な俳諧師・小説家である大坂の井原西鶴は、当社を訪れ「むくけうへてゆう柴垣の都哉」という句を詠んでいる。句は延宝7年(1679)発刊の「河内鑑名所記」に掲載されている。



22 歯神社「歯磨面」

(柴籠神社境内)
乳児が母の乳房を噛んだという「ちちかみばし」伝承のある末社の住吉社(歯神社)に「歯神さん」が祀られている。反正天皇が水歯別命と呼ばれていたことから、歯の健康を願う「歯磨面」が設けられている。「ハ」にちなみ、毎年8月8日夜8時8分から祭典が行われる。



8 屯倉神社

(南あわじ市榎列大榎列)
5世紀以降、三原平野には、天皇家の直轄地とされる淡道屯倉が設置された。当社は、屯倉の址に創建されたと伝える。明治時代に近くの日前神社に合祀された。



9 反正天皇「産湯の井戸」

清水神社の旧地と産湯の井戸(堺市美原区小平尾)
反正天皇は、松原市が含まれる河内国丹比郡(たじひぐん)で生まれたという伝承もある。明治時代まで丹南郡多治井村(現堺市美原区)の羽曳野丘陵には、反正天皇を祭神とする清水神社が祀られていた。同社址に、反正天皇産湯の井戸と伝える清水井が残されている。



10 正井殿

(松原市岡3丁目)
正井殿は素戔嗚尊(すさのおのみこと)を祭神とし、丹北郡岡村に祀られる。明治7年(1874)の「吉村限取調帳」に、正井殿は反正天皇が丹比柴籠宮に所在したという産湯の井戸で玉水を汲んだ井戸跡に建てられたと伝える。隣村の立部村には、反正天皇に土器を焼いて献上した土師部が居住したという。



15 飛鳥川の歌碑

(羽曳野市駒ヶ谷)
覚峰が反正天皇の仮宮の出来事を河内の飛鳥川に託して建てた歌碑。江戸時代後半の文化2年(1805)5月に飛鳥川のほとりに建てた。
柿本人麻呂が詠んだ飛鳥川の歌も記されている。



16 当岐麻道の碑

(羽曳野市駒ヶ谷)
反正天皇の兄、履中が皇位継承の争いの中、難波宮から大和へ向かう途中通った当岐麻道の新池沿いに建てられた碑。覚峰が古墳上に祀られていた天満宮(大塚家)が当社に合祀され、手洗石に転用された石室材が移された。



23 河内大塚山古墳出土の石室材

(柴籠神社境内)
神社東方に、列島5番目の巨大前方後円墳の河内大塚山古墳(宮内庁・陵墓参考地)が6世紀中頃〜後半に築造された。全長335m、前方部幅225m、後円部径185m。古墳上に祀られていた天満宮(大塚家)が当社に合祀され、手洗石に転用された石室材が移された。



24 難波神社

(大阪市中央区博労町)
仁徳天皇を祭神とする。当社は反正天皇がミヤコを丹比柴籠宮に移した時、同時に父の仁徳天皇をしのんで柴籠の宮地に創建したのが始まりと伝える。平安時代に、今の大阪市天王寺区に移り、豊臣秀吉の時に、現地の御堂筋沿いに移った。



25 反正天皇陵古墳

(堺市北區北三国ヶ丘町)
宮内庁が反正天皇の陵と治定し、百舌鳥耳原北陵と呼ばれている。所在地名をとって、田出山古墳ともいう。百舌鳥古墳群の北端にあり、全長148m、前方部幅110m、後円部径76mの前方後円墳である。世界遺産に登録されている。



26 方違神社と向井神社

(堺市北區北三国ヶ丘町)
方違神社は反正天皇陵古墳(田出山古墳)の北東に接し、向井神社が合祀される。向井神社は、陵の陪塚の天王古墳・鈴山古墳近くにあった。陵に向かうことから向井と名付けられ、反正天皇を祭神とする。方違神社に向井神社の標石が移されている。

